

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／  
による魂の救済をめぐる

有 田 英 也

## はじめに：1920年代のフランス<思春期>文学

思春期はフランス語で«adolescence»もしくは«jeunesse»と表される。前者の«adolescence»は男女とも「青年期」と括られ、第二次性徴期に若い男女の身体がそれぞれ被る特徴的な変化から、おおむね男性は14歳から20歳、女性では12歳から18歳とされる。それはヒトが身体的に、また社会において「成人」するための長く、時には激しい「成熟」の準備期間である。この時期の男性は«adolescent»、女性は«adolescente»ということになるが、それは総称であって、個々の<思春期の青年男女>は、それぞれ«jeune garçon»«jeune fille」と呼ばれる。これらの語句には、後者の«jeunesse»の持つ「青春」の心意気なり未熟さなりが、年少の男女のイメージに反映している。

文学の中の<思春期>へのアプローチはふたつある。<思春期>の少年少女について書かれているのか、それとも<思春期>の少年少女を読者対象としているのか、という区別である。前者のアプローチでは、第二次世界大戦後のアメリカ文学を対象とする研究が、ワイルダー『大草原の小さな家』(1941)やサリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』(1951)のカルト的受容とともに参考になる<sup>(1)</sup>。後者の<思春期>の少年少女を読者対象とする文学については、それらの書き手、読み手、そして作品の送り手を射程に入れたメディア論、社会学、さらには心理学的考察が必要となる<sup>(2)</sup>。

<思春期>の少年少女について書かれている文章では、フィクションなのか、それとも手記や調査記録、あるいは<思春期の青年男女>の親から寄せられた手紙といったノンフィクション、ドキュメントに属するものなのかが問題になるだろう。ただ、文学はしばしばドキュメントに擬態するし、読者からの手紙を紹介しつつ連載小説を書きつぐ作家もいる。想起と想像の弁別

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 3  
がつねに明快でもあるまい。そこで職業作家の書いた小説と回想録を対象として、フランス文学における〈思春期〉について考えることにしよう。

文学の中の〈思春期〉あるいは思春期文学について、書き手、読み手、送り手の関係に注目した歴史研究には次のようなものがある。空想科学冒険小説のフランスにおける始祖と言えるジュール・ヴェルヌと、彼の「生みの親」である希代の出版人ジュール・エツェルについては、すでに数多の研究が公刊されている。また、19世紀から20世紀前半にかけての英仏語圏の児童文学について、これを帝国主義との関連で読み解く研究も少なくない。ヴェルヌについては、杉本淑彦の労作が挙げられる<sup>(3)</sup>。あるいは、普仏戦争の敗戦後、フランスで中学校の教科書として公刊され、地方の発見と国民意識の醸成に貢献したとされる当時のベストセラー『ふたりの子どものフランス周遊』(1877)も、すでに歴史家、文学研究者によって取り上げられ、一時期、一地域の国民教育と関わる文化現象として批判的に検討されている<sup>(4)</sup>。このように研究の裾野はかなり広い。そこで、本論では〈思春期〉の少女少女について、リアリズムの手法で書かれた物語を、発表時期を限定して取り上げ、そこに描かれた〈思春期〉像の特徴を、文学史と文化研究を参照しながら論じることとする。

少女少女のうちフランス近代文学において主題化されたのは、圧倒的に«jeune fille»つまり「若い娘」である。なぜなら、歴史家アラン・コルバンが浩瀚な『夢の少女たち』で、神話、文学、彫刻と絵画を対象に論じたように、10代後半に傍目にも性の目覚めが看取されてから結婚するまでの数年間の女性は、男性のみならず女性読者にとっても、さまざまな欲望の交差する幻想の対象になってきたからである<sup>(5)</sup>。それ以後の女性は«jeune femme»(若い女性)として、家庭婦人か未婚の職業婦人となるか、あるいは両親の家に留ま

るなりして、「若い娘」から区別されたひとつの社会的地位を得た。川本静子が近代英文学において捉えた未婚の女性家庭教師ガヴァネスが、「余った女たち」と呼ばれるのは、彼女たちが明確な社会的地位と不明瞭な性的指標とによって、「余白」に追いやられているからであろう<sup>(6)</sup>。

はたして＜思春期＞男性は文学的テーマになりにくいのだろうか。そんなことはない、という声がすぐさま聞こえてきそうである。ドイツ文学で「教養小説」と呼ばれる«Bildungsroman»は、成長小説とも言って、多くは少年もしくは青年が迷いながら、人生の道標を発見するプロセスを物語る<sup>(7)</sup>。だが、読者は主人公の思春期が、自分の生きる道をついに見出すまでの通過点に過ぎないことをよく知っている。それはロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』(1903-1912)がそうであるように、架空の偉人伝なのである。あるいはフランスで「大河小説」に含まれるマルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』(1922-1940)は、トーマス・マンの『ブッデンプロック家の人々』(1901)がそうであるように、個々の家族の人生をリアリズムの手法で物語って大きな流れとなしたが、そこでも青年が青年のまま留まることは難しい。彼が一人前になり、その個性を周囲から承認されることが、「形成」(Bildung)に方向づけられた物語作法から要請されるからである。だが、20世紀の大河小説は、教養小説になりきることに、時代的制約とも言うべき困難があった。

このことから、ふたつの仮説が立てられよう。＜思春期＞女性、つまり「若い娘」についての幻想が退潮した時に、＜思春期＞男性、ひとまず青年(«adolescent»)と名指しておく人物が、文学的テーマとして脚光を浴びたのではないだろうか。そして、この交代劇は、多数の青年が死の影に怯え、また実際に生命を奪われた第一次世界大戦に由来するのではないだろうか。「大いなる戦争」に投入された青年を描いた小説は、第一次世界大戦百周年の2014

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 5  
年から2018年にかけて多くの研究者に注目され、本論の筆者も考察を試みた<sup>(8)</sup>。

この交代についての仮説は、コルバンによる「夢の少女」像の史的考察が、1913年に刊行されたアラン＝フルニエ『グラン＝モース』によって締めくくられていることにもよっている。フランス文学史において1913年は特別な年で、その前後が截然と分かたれる傑作が多数発表された<sup>(9)</sup>。プルースト『失われた時を求めて』第1巻「スワン家の方へ」、マルタン・デュ・ガール『ジャン・バロワ』、詩集ではアポリネール『アルコール』、シャルル・ペギー『ノートルダムの綴れ織』、ブレース・サンドラール『シベリア横断鉄道とフランスの小さなジャンヌ』、さらにジャック・コポのヴィユー・コロンビエ座創設などが挙げられる。フランス文学が新しい感受性の受け皿になりかけたまさにその時、戦乱が翌1914年から1918年までヨーロッパを蹂躪し、これらの新しい感受性の持ち主たちを翻弄した。よく知られているように、プルーストの小説は、そのためにプランの大幅変更を見た。最終巻「見出された時」は空襲下のパリを舞台とし、語り手が＜思春期＞を過ごしたコンブレの教会は爆破されてしまう。また、この戦争でアラン＝フルニエとペギーは戦死、アポリネールは戦傷死（スペイン風邪との説もある）、サンドラールは右腕を失った。コルバンの『処女崇拜の系譜』の訳者のひとり、小倉孝誠が、この研究書を評して、「いまでは消え去った感性と情動をめぐる考古学的な考察」と書いたように、「若い娘」に対する「感性と情動」は根底的に変わった<sup>(10)</sup>。だからこそ、かつての情動を思い出せる世代は、その後に新しく＜思春期＞を文字にしなくてはならなかった。本論が注目するのは、新旧ふたつの感性を抱え、困難な成熟を果たそうとした戦後のフランス作家が、1920年代半ばに発表した先駆的な作品のいくつかである。

作品の刊行順に記せば、コレット『青い麦』（1922年に新聞連載、翌1923年に大幅加筆されて単行本で刊行）、コクトー『山師トマ』（1923）、マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』（1922-1940）より「美しい季節」（1923）、そしてジッド『一粒の麦もし死なずば』（1920-21年にベルギーで少数の私家版が刊行。『新フランス評論』も抜粋を掲載し、1924-29年に改訂版）の4作である。

ここに挙げた作品の書き手は、その後、作風を変えてそれぞれに円熟していった。とはいえ、＜思春期＞を語る著作はただの通過点ではない。最年長のジッドは1869年生まれ、コレットも1873年生まれなので、これら1920年代半ばの著作は、彼らが50歳にさしかかって見出した＜思春期＞だった。最年少のコクトー（1889年生まれ）にしても、20代半ばで経験した戦場を、10歳若い主人公トマに駆け抜けさせた。マルタン・デュ・ガール（1881年生まれ）は、『ジャン・パロワ』でドレフュス事件の真相究明に関わってゆく19世紀末の青年群像を描いたが、『チボー家の人々』の「美しい季節」では、ベル・エポックのパリと郊外の別荘地を舞台に、作者と同世代とおぼしい兄アントワースが19世紀的な「異郷の女」ラシエル（ユダヤ系で、かつてサーカス団員を夫とした）に惹かれる一方で、作者より10歳ほど若い弟ジャックが、反目するフォンタナン家の娘ジェンニーと、もどかしい＜思春期＞の恋をする。これらの作品は、＜思春期＞の青年男女の感受性を、当時の読者に鮮やかに描きだすとともに、精神的外傷からいかに回復して社会生活に有効な他者像を獲得するか、言いかえればいかに成熟するかを問うたのである。その意味で、コクトーの主人公とマルタン・デュ・ガールの描く兄弟が戦火を生き延びることができず、またコレットの少女が幼馴染の未来の兵役生活を思い描きながら、物語は休暇地の夏の終わりに二人を置き去りにしている

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐって 7  
ことは、戦争という外傷からの回復がかくも困難をきわめたという点で意味  
深長である。これらの1920年代に発表された作品は、1930年代以降の、社  
会参加する作家像によって特徴づけられるフランス文学にとっても、ひとつ  
の「青春」«jeunesse»だったのである。

本論は数回にわたって発表される論考の一部である<sup>(11)</sup>。いずれも作品への  
アプローチにおいて、作者自身ないし特定の世代に共通する集団的な外傷経  
験が、過去の文学作品をどのように換骨奪胎して描かれているかに注目する。  
作家たちが新しい感受性と情動の美酒を、古くてよく知られたフィクション  
の革袋に入れて、1920年代の読者に差し出したと考えるからである。

革袋とは、コレット『青い麦』では、まず新聞連載第4回の表題「ダフニ  
ス」に示されていたようにロンゴス『ダフニスとクロエ』であり、次に微か  
な言及ではあるが、シャトーブリアン『アタラ』に倣ってヒロインがアメリ  
カ先住民族の女になぞらえられている<sup>(12)</sup>。

コクトーは、作者が母親宛の手紙（1922年10月24日付け）で明かしてい  
るように、スタンダールの『パルムの僧院』に依拠して、小説第2作『山師  
トマ』を書いた。お手本から主人公のワートルローにおける「夢のような」  
冒険を借用し、コクトー自身の芸術的庇護者ミシア・セルトがスタンダール  
小説のサンスヴェリーナ公爵夫人に仮託される。また、自作でトマの恋人と  
なる若いボルム太公女に、ありし日のミシアを重ね、さらに兵士たちが戦地  
で思慕する幾人もの「若い娘」が配される。

マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』では、チボー兄弟それぞれの  
恋が、常套句の分析を通して、19世紀の文学的主题「異郷の女」と「若い娘」  
から読み解かれるだろう。なお、弟ジャックが思いを寄せるのは、神経質な  
美少女ジェンニーだが、他方でチボー家に引き取られて、ジャックに対して

幼馴染のように振る舞う少女ジゼールが、マダガスカルMadagascarの混血女性（*métisse*）を母とすることも忘れてはなるまい。

本論では、刊行順でもっとも新しいが、19世紀末の1897年秋に書き出され、執筆の佳境が第一次世界大戦中とおぼしいジッドの『一粒の麦もし死なずば』を取り上げる。

## 1 幼年時代と＜思春期＞

ジッドの『一粒の麦もし死なずば』は、少年が11歳になる前に迎えた父親の急死（1880年10月）について語る第1部第3章末尾までで、彼の幼年時代をほぼ語り終える。特に第1章は、幼年の自画像を綴った美しい文章である。まず、幼児性欲と幼い従姉の裸の肩に噛みついた加害体験が告白される。ジッドは、「問題を抱えた子どもを描いた本」として、彼の回想録を読者に差し出す。ところが、ビー玉と万華鏡という輝く玩具の思い出によって、物語が軽妙な調子になると、今度は暗転して、後に失明したある目の悪い少年との出会いが語られる。その後は、定番の読書、リュクサンブール公園での女中との散歩、私塾での幼児教育とピアノのレッスンと、一見とりとめなくブルジョワ子弟の感情教育の道筋が辿られる。そして、みずからの内に潜む二重性が、母方の親戚の住むセヌ下流のノルマンディーと、父方の南仏ラングドックとの対立として、また母方のカトリックと父方のプロテスタントの対立として立体的に示された後に、この作品の制作意図が早くも露呈する。「これらあまりに多様で、放っておいたらいつも喧嘩をするか、少なくとも内心で対話を始める諸要素は、芸術作品によってしか調和させられないのだから、自分は芸術制作を強いられている、と思いなしたものだ」<sup>(1)</sup>。芸術はその



ような家庭と素質に生まれついた者の天職だと言うのであろう。次に創作意図が明かされるのは、従姉エマニュエルとの出来事から自分の「宿命」に気づいて後のことであるが、これは本論第4節「天使的女性像」で後述する。

いかにもジッドらしいことに、この時点で、回想する「私」と少年の「私」が、書くほどに揺れる記憶を通して向き合い、自伝の真実とは何であるかが問われる。「思い出が寄せるまま秩序づけずに書こう」(p. 91)と決めたからには、たとえばプロイセン軍のルーアン入城のように、著者の年齢からも、また母親の記憶と照らし合わせても、模造記憶としかいいようがないものを、回想の真実として書くことが許される<sup>(2)</sup>。すると、舞踏会の夜の幻想的な体験が、急死した父が今いる場所はどこだろうか、という問いとともに、異なるタイプの現実性を持つ「もうひとつの生」(p. 93)への関心を少年の心に宿らせる。これはかつての若き象徴派詩人ジッドの尻尾なのか、それとも幼年時代に一般的な感覚なのか、語り手はそこを詰めずに、「クロウヌ通りに戻ろう」(p. 94)と話題を切り上げ、ポートレート集とも言うべき人物評伝に移る。こうして母親の元家庭教師にして年長の友アンナ・シャクルトンの長い回想が、第1章の終わりから第2章の冒頭にかけて始まるのである。

それ以降、ジッドの筆致は、映画の固定ショットのように精確になる。母ひとりに育てられた神経質な男児の心理と言動が、様々な場所で、また様々な交じらいの中で記されると、〈思春期〉を彩る主題が次々に現れる。ジッドは、自分の学校、異性（あるいは同性の性的対象）、宗教、アイデンティティにまつわる経験を回想しながら、「そこに自分自身を見出す読者の数が多くなる」<sup>(3)</sup>ように、きわめて具体的に物語る。だがその一方で普遍的な主題も拾い出す。そして、〈思春期〉の子どもが抱える問題は、大人になるには乗り越えるか抑圧しなければならず、自身のことであればなおさらその克服

と封印のプロセスを語らずにおきたいはずなのに、あえて回想録作家は真率 (sincère) であろうとする。モーリス・ブランショはジッドの生前、『日記』に依りつつ、「青春時代は真率、円熟期にはくよくよく書くこと」が目標だったと「ジッドあるいは経験の文学」で論じた<sup>(4)</sup>。第1部第1章の作家は、円熟期の理想を抱いて、幼年時代を真率に、また見事に描いたが、この相矛盾する方針は、＜思春期＞の主題を語るときにどのような変異を見せるのだろうか。

というのは、『一粒の麦もし死なずば』は50歳を過ぎた作家が公表する回想録である。かつて、「家族たち、わたしはお前を憎む！閉ざされた家庭 (「Foyers clos」、閉ざされた戸口よ！)」<sup>(5)</sup>と高らかに宣した作家は、回想録の執筆によって、自らに強いた芸術制作の結果を問い直すことになるからである。それは内包する反対物を芸術によって調和させる試み、言い換えれば芸術制作による自己救済というまさしく＜思春期＞にふさわしい企図を、『日記』とは異なる手法で対象化する試みでもあったろう<sup>(6)</sup>。幼年時代を語りながら、ジッドは終わらない＜思春期＞の決算を図っていたはずである。

## 2 なぜ＜思春期＞を語るのか

『一粒の麦もし死なずば』は小説でなく回想録だが、第1部末尾に付された次の一節が、フィクションと自分語りの共犯関係を示している。「この回想録を読んでくれたロジェ・マルタン・デュ・ガールは、僕がいつも言い尽くさないものだから、読者を欲求不満にさせるといって責める。けれども、僕は一貫して、すべてを言い尽くそうとしたのだ。だが、わざとらしくするか、むりにでなければ乗り越えられない告白の水準があるのに、僕は努めて自然

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 11  
体であろうとしている。(中略) 何より厄介なのは、同時発生する混乱した事  
態を、順次生起するもののように提示しなくてはならないことだ。回想録で  
は、どれだけ真実を心がけてしようと、絶対に半分しか真率でいられない。  
おそらく小説のなかでこそ、人はよりいっそう真実に近づきうるのかもしれ  
ない。」(p. 267)

「真率」と訳した形容詞は«sincère»である。『フランスの自伝』の著者フィ  
リップ・ルジュヌスは『自伝契約』に収めたジッド論で、「読者はしまいに芸  
術と<真率>の間に二律背反があると信じるにいたる」<sup>(1)</sup>と、うまく書かれ  
すぎた自伝や回想録の信憑性に疑義を唱える「刑事のような読者」がいると  
指摘する。これこそ文章家ジッドが恐れ、かつ逆手に取った読み方である。

このジッドの一節は、回想録が私家版として少数だけ知人に贈られた時  
にすでに第1部の末尾に置かれていた。ここで同作が作家の生前に公刊され  
た経緯を整理しておくのは無駄ではあるまい。マルタン・デュ・ガールら  
『新フランス評論』の同人は、一般読者に先立って回想録の内容を知り、作者  
が彼らの感想を尊重して書きついでように読めるからである。

ブリュージュ版の第1巻(1920)は8章のみである。その第2巻(1921)  
も私家版だが、後の第1部第9章、第10章、そして第2部の第1章と第2章  
がそこにまとめられた。これが『一粒の麦もし死なずば』の原型である。こ  
れと並行して、『新フランス評論』に抜粋が、1920年2月号から翌1921年1  
月号までほぼ毎号、飛んで1924年1月号に掲載された。つまり、一応の完成  
を見た当初の8章立て回想録に、まず文学仲間への朗読を経て9章、10章が  
加筆される。さらにロジェ・マルタン・デュ・ガールへの返答が10章末尾に  
置かれる。これはブリュージュ版第2巻では、本文から独立して「補遺」  
(appendice)とされている。

こうして、ジッドはあたかもさらなる真正さを求める友人に促されたかのように、第2部で1893年から翌年にかけての北アフリカ旅行<sup>(2)</sup>を回想しながら、みずからの同性愛を告白する(第1章)。そして、オスカー・ワイルドおよびその愛人とアルジェで過ごした日々を語って、ついに母の死(1895年5月31日)の追想に至り、「それからしばらくして僕たちは婚約した」(p. 327)とエマニュエル(マドレーヌ・ロンドー)との結婚を暗示して回想録は締めくくられる(第2章)。狂言回しにされたマルタン・デュ・ガールは不満だったようだが、これこそ告白を小説とないませにするジッドの戦略に他ならない。北アフリカでの乱行は、小説『背徳者』(1902)にすでに書かれており、その真正性を回想録が裏書きしたのである。回想録第2部のアフリカ旅行の条には、小説『背徳者』で語られた細部、例えばビスクラのテラスを廻らせたアパルトマンへの言及(p. 280)があり、マルタン・デュ・ガールに答えたように、すでに小説の中で真実に迫っていたことを明かしている。

ルジュヌヌは『自伝契約』で、意図的なフィクションと自伝の相互浸透関係を、巧みに「自伝空間」と呼んでいる。ジッドは『一粒の麦もし死なずば』の改訂版を1924年に準備していたが、これがNRF(ガリマール社の出版部)から発売されたのは1926年10月、つまりジッドが唯一「小説」と呼んだ『贗金使い』を発表した翌年である<sup>(3)</sup>。また、1926年にジッドは『贗金使いの日記』を公刊した。これではアンドレ・ジッドという人格そのものが虚構に思えてくるだろう。この仕組みが「自伝空間」に他ならない。

回想録のタイトルは、『背徳者』のエピグラフがヨブ記を引いていたように、新約聖書「ヨハネ伝」第12章24節で、イエスがエルサレムで弟子に語った言葉に基づいている。新共同訳を引けば、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」という一節で

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 13  
ある。プレイヤッド版の注解で、ピエール・マッソンは、早くから生前に回想録を出版するつもりだったジッドの意図は、「イエスの力を芸術に移し替える」ことだったとし、それゆえ「この書物は、福音書の麦粒のように、ひとつの死と復活でなくてはならない」と断じている<sup>(4)</sup>。この解説では「生前」という語が大切である。もし没後刊を期して回想録を書くのなら、「一粒の麦」に喩えられる個人の生が終わった後で、作品の言葉に置き換えられた生が、多くの読者という「実」を得て文学史に復活する。他方、生前に出版されれば、作者はいわば作品という「墓の彼方」から読者に語りかけることができる。生きながらにして回想録による魂の救済を期待できるのだ。ただし、この虚構の死者が高らかな口調を持つには、老齢や災厄によって迫り上がる死の予感が必要だろう。

『一粒の麦もし死なずば』には戦争の影がある。ジッドは1916年6月15日の『日記』に、「もし誰かに、砲弾の反響が大地を揺らす折もおり、よくこんな仕事に身が入ると驚かれたとしたら、まさしく想像を働かせる仕事が、思索の仕事が、何ひとつできないからだ、と言うだろう。私は外界と内心をいたるところで揺さぶられ、今日、こうした思い出を書いているのは、そこにしがみついたためでもある」<sup>(5)</sup>と書いている。

回想録の進捗を『日記』に尋ねれば、同年1916年の10月に、ジッドは第4章を書き終えている。実際、第4章の終わり近くに、後述するように「1916年執筆」(p. 156)という注記がある。この章の主題とは何だろうか。魂の救済は回想においてどう書かれているのだろうか。

第4章では＜思春期＞の少年の苦しみが語られる。8歳から通ったパリのアルザス校には、カメの剥製の「歯」について毎度お馴染の講釈を垂れるブリューニヒ副校長の理科の授業など、楽しい思い出もあった。だが、父ポー

ルが急死すると、直後にアンドレは後述する神経症の発作を起こして休学した<sup>(6)</sup>。集団生活に馴染めなかった少年が一年近くも家庭教師に頼っているのを、さすがに母親は心配して家庭教師を雇い<sup>(7)</sup>、その年の冬、父方の親戚の暮らす南仏ラングドックのモンペリエに移り住んだ。転入した国立高等中学校では、ジッドのようなプロテスタント教育を受けた生徒と、カトリックの生徒が混在していた。良家のカトリック子弟は「坊さんの学校」に行っていたから、転入生はもっぱらカトリックの庶民に攻撃された。「移動サーカス団長の息子ロベス」や「ゴメスとかいうスポーツ選手みたいな不作法者」(p. 151)からのいじめは、それ自体、首都と地方の教育格差や階級対立を反映しているそうだが、1880年代初頭の、フランスに義務教育制が敷かれる前後の緊張した歴史的状況も書き込まれている<sup>(8)</sup>。語り手はユゼスの土地柄についてあえて時系列を乱し、「17歳頃の冒険」も叙述する。従兄である近在の牧師の家まで行った帰りに、バルザックの小説を読みふけて鉄道を乗り換え損ねた青年は、見知らぬ駅で降ろされ、近傍の農家に夕食を請うた。農夫は彼の従兄も祖父も知っており、食後に暇乞いをするが早いともう青年を泊める支度をしていた。家長の司る就寝前の祈りの後に、考察が始まる。祖父の世代は彼らの祖先を苦しめた迫害の経験を忘れておらず、少なくとも抵抗の伝統を保っていた。人々の手本となれ、というマタイ伝5章13の「地の塩」の説話が引かれる。だが、ジッドは諧謔味を忘れない。祖先は「化石哺乳類」に例えられ、今は耳の不自由な老婆となった彼らの妻たちが、教会で大声を出して顰蹙を買うところまで記すのだから (pp. 103-106)。このように、回想記作家ジッドの筆致は、個人的体験を語りながら、一般的な問題を提起するところに特徴がある。

少年は、病気で3週間も寝込んでいた間は学校に行かずに済んだので、「軽

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 15  
い天然痘に罹った、助かったぞ！」(p. 151)と有頂天だが、同級生に惨殺される悪夢に悩まされた。回復しても、いざベッドから起き上がると目眩を起こす有様だった(p. 152)。さらに、少年は手足を制御できなくなって歩行困難に陥り、神経症の発作を起こす。これはジッド自身が書いているように、「今でこそ白状するが、こうした激昂には理由がなさそうだ。つまり、僕のしていた動作は、もし意識されていたとしたら、ほぼ意図的としか言いようがないからだ」(id.)と、詐病の疑いがあった。そのため、呼び集められた3人の医師のひとりから、「マダム、この子のお尻をひっぱたいてやれば治りますよ」(p. 153)と険しい目つきで睨まれるほどだった。こうして診断のついた少年は、10ヶ月も鉱泉地で療養した後に、パリのアルザス校に復学したものの、今度はひどい頭痛に悩まされた。

療養の思い出を語るさいに、節辞法が使われる<sup>(9)</sup>。ジッドは最初、療養地の森と谷と藁葺き屋根を描写していたが、これを回想録に筆写することを拒むのである。なぜ、読者を喜ばせ、語り手にとっても内容を自虐的でなくさせられる描写の技を用いないのだろうか。それは、頭痛が二十歳頃には跡形も無くなっていたので、南仏で学校に戻るまいと詐病したように、これも見せかけではなかったかと疑うからである。不安神経症の少年と成人した語り手が対峙する。だが、語り手は、「46歳の頭痛と13歳のそれがまったく同じだと分かり、そのせいで努力が続かなかったのかもしれないと納得する」(p. 156)。この箇所の注に、「1916年執筆」とあるので、まさしく砲撃を聴きながら書かれ、推敲された文章だったことが分かる。この時、13歳の頭痛の真相が、復学を回避するための詐術から、心身に宿って間歇的に吹き出す「悪」(フランス語では「痛み」と同じ«mal»)に読み替えられる。ジッド少年の内側に周囲との調和を拒む何かがあり、また周囲の環境にも、ロベスやゴメスのよ

うな自分ではどうしようもない存在がいて夢にまで出沒して威嚇するのだから。

「まさしく悪魔（«diable»）が僕を窺っていた」（p. 157）。プロテスタント教育を受けた幼いアンドレ・ジッドは、自分に注がれる批判の声をたえず先回りしようとする。回想録の全体を読んだロジェ・マルタン・デュ・ガールは、「おそらくプロテスタントに由来する暗黙で常套的な非難めいた調子」を聞き取った、と後年の回想「アンドレ・ジッドについてのノート」に書いている<sup>(10)</sup>。また、第2部第1章でも、同性愛を罪と感ずるみずからの心性が、「ピューリタンの教育が僕をそんな風に培ったのだ」（p. 269）と分析されている。罪悪感に苛まれる幼年時代は、「暗闇から尋問されっぱなしで、どこから光に触れられるかまったく見当がつかなかった」（id.）と、寄る辺ない心境が黒々と描かれる。

このまさに第1部第4章末尾で語り手は、その闇がやがて書かれるべき書物の中の一契機であると告げる。「この時、後述する天使の取りなし（«l'angélique intervention»）が、僕を悪魔（«malin»）から引き離そうとふいに現れたのだった」（id.）。プレイヤッド版の編者マッソンによれば、『一粒の麦もし死なずば』には贖罪劇として構成上の工夫がなされており、第4章末尾に予告された「天使の取りなし」（p. 157）は、編者マッソンによれば後にジッド夫人となる従姉マドレーヌである<sup>(11)</sup>。だが、本論は、今しばらく回想録から直接読み取れるものを注視しよう。

この悪は第5章で食欲不振と言ひ換えられ、母ジュリエットをさんざん悩ましたが、ジッド少年は、ピアノのレッスン、読書、ドイツ語の勉強を経て、やがてアルザス校でピエール・ルイと親しみ、彼と首席を争って優等生の地位を得る。この友人とは、『アフロディット』『ピリティスの歌』の著者 Pierre Louÿs（作中では Louis）である。第8章のクライマックスは、『アンドレ・ワ



アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 17  
ルテルの手記』の出版（1890）だろう。『アンドレ・ワルテルの手記』の完成  
は、「これらのページを読み直すとイライラする」（p. 228）と、書く時点の  
話者が介入しながら語られている<sup>(12)</sup>。この処女作に回想録作者ジッドが認め  
る長所は、「僕の青春の不安な神秘主義についての証言」（p. 243）に限られ  
る。

このように、『一粒の麦もし死なずば』は、途中で非時間的な少年時代の思  
い出が湧出するものの、ある目的論的な線状構成をしている。第4章までは  
冥界下りである。13歳の少年は心身に頭痛、外界に暗闇と悪魔を感じ、しか  
も詐病によって近親者を欺いたからには、すべてが黒く塗りつぶされた。一  
転して、第5章から第8章までは、青年が芸術を糧に光を求めて歩む行路と  
なる。これは見事な二幅対をなす<sup>(13)</sup>。

少年は＜思春期＞の病理を、もうひとつの病理、すなわち芸術家として立  
つという誇大妄想によって克服しようとした。これが妄想とならずに済むに  
は、家族と親友の協力が不可欠だろう。母親が後押ししたピアノを始めとす  
る音楽教育、秀才との競い合い、そして才女の従姉との文通、それらが回想  
記第1部後半で、＜思春期＞男性と社会との緩衝地帯となった。

### 3 ふたたび悪魔が

それでは、第4部末尾は、次の章からの復活を準備するために配された、  
第一幕の締めくくりの場に過ぎないのだろうか<sup>(1)</sup>。いや、「悪魔」の所業を  
「天使」が掣肘するわけではない。内心の悪は第5章以降も続いている。食欲  
不振がつのってコートダジュールで療養中の子どもが、医師から腸内ガスと  
診断されて整形帯をつけさせられ、さらにやせ細ったこともある<sup>(2)</sup>。しかし、

悪の内面化が際立つのは、叙述が時として時系列を逆行して、語り手が青年期にさしかかった自身に〈思春期〉の病理を見出す時である。

ジッドがドイツ語で《Schauern》（身震い）と呼ぶ感情の高ぶりが第6章と第7章に三度ほど記述されている<sup>(3)</sup>。ジッドの回想録は、〈思春期〉の混乱や迷いさえも彫琢された文体で語るが、イタリックにされた外国語はいかにも異様である。

その内実を示せば、まず、いつかは正確に思い出せないが、さして親しくない4歳の少年の死に衝撃を受けたことがある（p. 165, 207）。

次は、父の死後間もなく「僕は他の人たちと違うんだ！」（p. 208）と朝食中に思わず叫んで涙が止まらなくなった11歳の頃の思い出である。ここは精神分析あるいは哲学で言うような「他者」が少年に現前したと言うより、父の亡き後、母と母方の親戚にノルマンディーの家で取り囲まれている自分に気づいて、不意に「僕はこの家の子ではない！」と泣きじゃくったのだろう。「あまりに多様で、放っておいたらいつも喧嘩をするか、少なくとも内心で対話を始める諸要素」（p. 89）が、母親由来の個性にあらがって出口を求めたのである。

最後は、1884年と明示された15歳前後の出来事である。まさに〈思春期〉の少年は、街娼のいる路地を歩いて通学する級友を心配して、本人の前で顔を紅潮させて泣き出してしまった（p. 207）。いずれも語り手その人には説明のできない「顫え」が、彼を襲ったのである。第7章の中学生にとって、「この奇妙なオーラ（《aura》）の激発は、間遠になるどころか根付いてしまったが、緩和と統御をされ、いわば飼いならされたので、ソクラテスが彼の馴染みの悪魔（《démon》）に驚かなくなったように、僕も平気になったのだ」（p. 208）。少年は無自覚な幼年時代を抜け出て、自分にだけ適用される特権

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 19 的で感覚的な世界認識を手にする。彼は涙を通して、「オーラ（アウラ）」や「悪魔」が自分にだけ見えるという、まさに＜思春期＞特有の幻想を抱くにいたった。

号泣を除けばそれぞれ内容の異なる経験に通底する三つの経験を、ジッド家の好意で手記と未定稿を読んで先駆的な伝記『ジッドの青春』（1956-1957）を書いた精神科医ジャン・ドレは、次のように説明する。「この奇異な状態を表すには、ジッドは外国語の助けをかりる必要があると思った。戦慄とか身震いの意味のドイツ語 Schaudern である。かれがドイツ語を選んだのは、異邦人といった印象を与えるからで、この印象は、後年かれが 19 歳になってドイツ・ロマン主義とショウペンハウエルに出逢って面食った異様な印象と関係がある」<sup>(4)</sup>。この説に従えば、ジッドがドイツ語をそのままにしたのは、少年の感じたものを、長じて外国語によってひとまず対象化したうえで、三度の「顫え」の思い出を、パリに戻って寄宿生暮らしをしていた頃の回想に差し込んで考察したからである<sup>(5)</sup>。つまり、回想記作家は、かつての自分を文章によって自在に操れる物語叙述に落としこみつつ、外来語を用いた文体的処理を施して異物感を表現した。

これと対照的な例が、第 5 章冒頭の同様に印象的な挿話に読める。母親が特別料理を作らせたり、牡蠣はどうだろう、と試したりしても、少年には嚙下できない。この食欲不振について、没後刊の手記「かくあれかし あるいは賭けはなされた」（1952）では、医学用語の「anorexie」が持ち出される<sup>(6)</sup>。回想の言葉に闖入した学術語は、語源的に「欠如」と「欲望」の合成語だとされ、リトレ辞典を引いて「嫌悪と混同しないこと」と注記される。『一粒の麦もし死なずば』の描写的な叙述が、学術語で代替されたのは、80 歳前後のジッドが書いた没後刊の手記であったが、回想録のドイツ語 Schaudern は、少

年を突然襲った眩暈のような衝撃と混在している。いずれの場合も、外界の出来事が内部に浸透して、内界を変質させてしまい、その結果、「自分が他人とは違ってしまった」ことを周囲に知られまいとして、当惑の涙を流したのであろう。あるいは異物とともに「悪魔」を体内に取りこむまいと食欲を失ったのだらう。それなら、「飼い慣らし」「馴染みになる」とは、悪に魅入られた自分を受け入れるようになったことを意味している。なぜなら、第7章の中学生にとって、悪魔は次の引用に見えるように、人間の心の暗黒が外界に投影したもののように読めるからである。「僕がひょっこり悪魔（«diable»）を信じたり、僕の聖なる反抗を、高貴な激昂を思ったりする時に、暗がりでは他者（«l'autre»）が揉み手をして笑うのが聞こえるようだ」（p. 210）

たしかに『一粒の麦もし死なずば』は、宗教的回心劇が芸術による救済劇に書き換えられた二幅対と読める。だが、他方で、異物としての外国語と学術語によって〈思春期〉の気詰まりを説明したジッドが、それがいかに通俗的な挿話であるにせよ、〈思春期〉男性を物語の主役にして、安全地帯から見事に自分を語ったのも事実である。ならば、悪魔に魅入られた〈思春期〉男性に「天使の取りなし」をした女性に、19世紀の「若い娘」の変奏を見ることができる（本論第4節参照）。ジッドが同性愛者だったため、夫妻は性交渉のない«mariage blanc»をしていたからである。

『背徳者』の主人公は、北アフリカで少年愛に目覚めて健康を回復していたが、回想録第2部のジッドは、チュニジアのビスクラで十代の娼婦たちとカフェの客となり、老いた黒人楽師のカスタネットに合わせて、「半裸でボロをまとい、悪魔のように（«comme un démon»）黒くしなやかに」踊る小柄なモアメッドに感嘆する（«Qu'il était beau ! » p. 285）。13歳の少年とは異なり、もはや「悪魔」という語は24歳の青年を怯ませない。

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐって 21

プレイヤッド版には、『一粒の麦もし死なずば』に採用されなかった画家ポール＝アルベール・ロランスとのアフリカ行の習作が収録されている。妻マドレーヌに朗読した回想録とは異なる、あけすけな同性愛体験と娼館の訪問記がそこに読める。とはいえ、内容はそれほど変わらないので、1920年に回想録第2部の数十ページを費やして、夫が旅の思い出を記した時、欺かれた妻は世間がジッド夫妻に投げかける視線を思っさぞ辛かったろう。第2部の語り手の攻撃的な非情さは、何に由来するのだろうか。マルタン・デュ・ガールから真率さを求められたというだけでは説明がつかない。

第2部第1章冒頭で、旅を想起する前にジッドが書いた前置きは、「1919年春に執筆」と注記されており（p. 268）、本論の次章で論じるある出来事が、「僕の人生で最重要のもののひとつ」と仄めかされている。この前置きでは、「1916年執筆」とされた第1部第4章末に続いて、ふたたび「悪魔」（«le diable»）が回想録の書き手に呼び起こされる。だが、1919年春の悪魔は、第1部の第8章までのように作品を均整の取れた救済劇にしてくれそうにない。悪魔は、二面性のある謎めいた出来事の引き金を、「天使の取りなし」を委ねられた人物マドレーヌに引かせていたからである。

#### 4 天賦的女性像

ジッド小説の愛読者にとって、これまでの叙述には違和感があるかもしれない。『背徳者』も『狭き門』も、天に召される清純な女性登場人物によって特徴づけられているのに、本論のもっぱら注目するのは、大人になりきれない、＜思春期＞の問題を抱えた男性だからである。『回想録』を書くジッドにとって、天賦的な女性たちとは一体何だったのだろうか<sup>(1)</sup>。

ジッドが回想録の制作意図を明かす第二の契機は、第1部第5章の始め、つまり第4章末尾で悪魔の介入と天使の取りなしについて語られた直後、少年が13歳になるかならないかのルーアンでの出来事である。従姉エマニュエル（現実にはマドレーヌ・ロンドー、後のジッド夫人）は、母親の不品行のせいで嘆き悲しんでいる姿を、ルカ通りの屋敷にこっそり戻ったアンドレに見られてしまった。語り手がこの時に直観した、「僕の人生の新しい東天の輝き」（p. 161）と呼ぶものが、人生の新たな指針だった。だが、「僕は心の奥底に、僕の運命の秘密を隠していた。運命がそれほど反対も邪魔もされなかったなら、この回想録を書いたりもしないだろうに」と、ジッドが天命を成就するのに障害のあったこと、それゆえ＜思春期＞が書かれねばならなかったことを仄めかしている。従姉マドレーヌ（作中のエマニュエル）の体現する天使が、なぜ家庭と社会に阻まれて取りなしに失敗したのかを書くには、母の死で終わる『一粒の麦もし死なずば』では足りなかった<sup>(2)</sup>。

ジッドは1890年12月に21歳の若さで『アンドレ・ワルテルの手記』を、次いで『ユリアンの旅』（1893）を23歳で発表している。この2作に代表される彼の＜思春期＞小説の公刊は、回想録の第1部第9章、10章、そして第2部で叙述される時期になされた。これらの作品を読みながら、母親は息子への心配を募らせた。その母の急死でジッドの＜思春期＞は、彼女を文学的達成で納得させることなく終わった。それでは回想録『一粒の麦もし死なずば』は、母親と天使的女性に、どのように肉薄しているのだろうか。回想録のこの部分、つまりブリュージュ版の第2巻に、＜思春期＞を回想しながら小説に組みこんだ『パリュード』（1895）、『背徳者』（1902）、『狭き門』（1909）への言及がある。それは、これらジッドの作家としての「円熟期」（クロード・マルタン）に書かれた物語が、自己の真実にフィクションによっ

アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 23  
て迫ったことを示している。

ジッドの母ジュリエットはジャン・ドレの伝記によって、不当にも「精神分析者の言う男性的母」<sup>(3)</sup> という評価を受けてきた。ノルマンディーのブルジョワ社会の伝統に囚われ、父を早く失った息子に専横的で、彼の健康を気遣うあまりに周囲との接触到に干渉した「去勢的母親」という扱いである。

ドレの著書を書評したジャック・ラカン<sup>(4)</sup> はさらに、「求婚者たちにも恩寵にも浮かぬ顔で、遅く訪れた結婚の空虚を、家庭教師に対する情熱で埋めるこの若い娘」(強調引用者) と評している。「息子が怪物たちを住ませたのも、この空虚である」。さらに、「母親もまた子どもの頃と同じ幻想を抱いたのだ」と断じる<sup>(4)</sup>。

クロード・マルタンがドレの『ジッドの青春』の続編として書き下ろした浩瀚な研究書『ジッドの円熟期』は、とりわけその第1部第1章「天国と地獄の結婚(1895年5月31日～10月8日)」が、上述の母子像への反論である。『一粒の麦もし死なずば』に読める、物分かりのいい父親と抑圧的な母親の対比が、事実<sup>(5)</sup>に反していそうなこともマルタンの書簡研究から分かる。また、過干渉な去勢的母親を持つすべての子が、芸術による自己救済を成し遂げるわけではない。ただ、<思春期>の問題を抱える子が、芸術によって成人しようとする時、作品の最初の読者とおぼしい人物の輪郭が、手紙(の草稿)から明らかになる。

ジッドは結婚の1年前(25歳の手前)の1894年にマドレーヌに宛てた手紙で、人生を作品に置き換えるという<思春期>の夢を語っている。「僕は『ナルシス論』以来、僕の全集を書き始めている——この論は言ってみればプロログだ——どんな部分も全体に欠落を感じさせずには消去できないようにしたい。僕のA.W.[アンドレ・ワルテル]の手記はそこから除外できる。

それはまさに作者の死後に刊行される作品さ」<sup>(5)</sup>。みずからに作家としての天命を感じる時、彼の書くものは日記であれ、手紙であれ、すべて未完成の「全集」に収められるべき断章となるだろう。＜思春期＞特有の強烈なナルシズムの感じられる手紙である<sup>(6)</sup>。この手紙を含むマドレーヌ宛の手紙のすべてが1918年に妻その人によって燃やされた時、ジッドは人生とその置き換えである作品との仲介を失ったことで、仲介という行為そのものをフィクションにしようと、回想録『一粒の麦もし死なずば』を完成させた。

モーリス・ブランショが明快に述べているように、「人が文学にひとつの人生を創造する力、それも生きる主体と異なる人生を創造する力を与えるのは、フィクションの自由な力を讃えるためであって、作者の求める自分自身の自由の意味を危険に晒す手段を、この自由のうちに承認するためではない」<sup>(7)</sup>。ジッドが、そのままでは社会的に排除される性癖を、みずから作り出した登場人物に仮託して放出し、思うがまま放蕩者なり犯罪者なりの人生を描き出すのは、「フィクションの自由な力」をよく知っているからである。だが、作者は密かに、この自由を危険に晒すことを、言い換えれば自分の作品を通して人々が悪癖に気づき、その結果、生身の人間としての自由を制約されることを望んでもいる。そうでなければ、ジッドは母親に自分の書いたものを読ませたりはしないだろう。マドレーヌもまた最初の読者であったはずである<sup>(8)</sup>。ジッドは彼女たちならフィクションの裏側の真実を読み取ってくれ、しかも彼の自由を奪いながら、社会から彼を守ってくれる緩衝地帯になると考えたのだ。

次の問題は、ラカンが断言した母と家庭教師の関係が、娘時代と結婚生活の空虚を埋める「情熱」であったのかどうか、である。それはアンナ・シャクトン（1826-1884）の人物をどう思い描くかで変わってくる。アンナはエ



アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』における／による魂の救済をめぐる 25  
マニュエル（マドレーヌ）とは異なり、また母ジュリエットとも違って、少年にとって天使でも代理母でもない、より人間的な「家族」として描かれている。アンナはジッドが＜思春期＞小説を書く前に死んだので、＜思春期＞の回想には影をとどめないはずだが、まるで言い落としたかのように第1部第9章で、「僕は物語に引きずられて、アンナの死をふさわしい時に語るができなかった。彼女は84年5月に僕たちの元を去った」(p. 229)と記す。つまりジッドが14歳になり、アルザス校への復学がひどい頭痛のために果たせず、リシャルド氏の私塾で勉強していた第7章が、アンナの死を語るにふさわしい叙述の地点ということになる。だが、そこではまだ＜思春期＞の問題が、＜思春期＞小説によって克服を試みられておらず、学業の成就と級友との交流によって成人に方向付けられてもいなかった<sup>(9)</sup>。芸術による救済とは異なるどのようなシナリオが、アンナ・シャクルトンと少年の間に描けたのだろうか。

回想録第1部第1章に「シャクルトン嬢はまさしく母の家庭教師として僕たちの家庭に入った」(p. 95)とある。『一粒の麦もし死なずば』の抜粋が『新フランス評論』に掲載された後、ジッドの従兄モーリス・デマレが、シャクルトン嬢が家の経済的不遇により家事使用人としてロンドン家に入ったように書かれているのに抗議した。アンナの父親はノルマンディーの鉄道敷設事業の技師として来仏し、アンナがロンドン家に入ったのは1850年から51、52年頃で、「君の母上が結婚される前からすでに、人々はくあの娘たち (demoiselles) >と呼んで分けへだてなく話していた」(p. 329)。この手紙は回想録末尾に添えられているが、ジッドは本文を訂正していない。

アンナが身につけていたのは編み物と堪能な英語、ドイツ語、そして水彩画というガヴァネスにふさわしい女子教育の才だけではない。彼女はまるで

イングランドのオールドミスのように植物採集と分類のマニアだった。ジッドの父の生前、彼女がユゼスに同道したこともある。「いったい何年にアンナがユゼスで僕たちと合流したのか言うことはできそうにない」(p. 101)と書くほど昔のことだったが、描写はかえって澁刺としている。「ガルドン川の岸辺にはツルボランが繁茂し、至るところで水の涸れた川底には、ほとんど熱帯植物のようなものが生えていた」(p. 101)。アンナは「新種の植物に驚嘆していた」。馬車から降りたジッド家の一行にとって、「村はまだ遠く、そこから天使のような鐘の音が弱々しく届いていた」。ここは第4章の「天使の取りなし」とは異なる描写文に過ぎないが、「このアンジェラスの鐘の音が、今も聞こえる。その魅惑の小径が目浮かぶ」という現在形は、時系列に闖入した非時間的な回想の趣である。

だからこそ、回想録第1部第4章で「悪魔」の囁きを聞いた少年は、第5章で語られる食欲不振に悩まされていた1883年の初頭に、現実の女性たちと魅惑の動植物の仲立ちによって、内面と外界の脅威からしばし解放される。ジッドは母ジュリエット、アンナ、女中のマリーと療養を兼ねてコートダジュールでひと冬を過ごし、アンナからはユーカリなど植物採集の手ほどきを受け、マリーとは磯の生き物を週に2、3度、「激しい頭痛」に襲われるまで、飽きずに眺めた。こうして、「頭脳は身体と同様、完全にヴァカンス状態」(p. 163)になった。女性たちに囲まれて被造物の神秘に心を奪われた<思春期>の少年にとって、この忘我の経験が、「問題」との格闘に休戦をもたらしたようである。

(本論文は平成30年度成城大学特別研究助成「トラウマを語り継ぐフィクション——20世紀の故郷喪失者から考える」の成果の一部である。)

## 註

はじめに

- (1) R.S. トライツ『宇宙をかきみだす 思春期文学を読みとく』吉田純子訳、人文書院、2007年 トライツは〈思春期〉の「子ども」から大人にまで読まれるYA（ヤングアダルト）小説、ライトノベルの著名作品を考察対象とし、学校教育の現場で、ポストモダン理論を援用しつつ、いかに教えれば良いかを論じている。
- (2) 斎藤環『戦闘美少女の精神分析』ちくま学芸文庫、2006年
- (3) 杉本淑彦『文明の帝国：ジュール・ヴェルヌと帝国主義文化』山川出版社、1995年
- (4) G. Bruno, *Le Tour de la France par deux enfants*, préface de Jean-Pierre Rioux, Texto, Tallandier, 2012; Jacques et Mona Ozouf, «*Le Tour de la France par deux enfants*» *Le petit livre rouge de la République*», *Les Lieux de Mémoire*, 1, Quarto, Gallimard, 1997, pp. 277-301
- (5) アラン・コルバン『処女崇拜の系譜』山田登世子・小倉孝誠訳、藤原書店、2018年
- (6) 川本静子『ガヴァネス——ヴィクトリア時代の〈余った女〉たち』みすず書房2007年。川本はそのような女性たちを内在的に描いた作品として、シャーロット・ブロンテ『ジェーン・エア』を取り上げ、その反逆的側面を指摘する。
- (7) トライツはドイツの哲学者ディルタイを引いたG.B. テニソンに依拠しつつ、英国ヴィクトリア朝の教養小説とアングロサクソン系アメリカ的な発達小説の使い分けを提案する。トライツによればテニソンは「Bildungsroman」をゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（1795-1796）の英訳者カーライルが流布させたヴィクトリア朝の概念だとするがトライツは懐疑的である。pp. 26-35, pp. 249-250
- (8) «*La Grande Guerre dans la mémoire littéraire des Français*», 韓国フランス文化フランス芸術研究会（CFAF）2014年大会報告集 *Actes du colloque*, pp. 33-48; 「フランス人の文学的記憶のなかの〈大いなる戦争〉——ジャン・コクトーの『山師トマ』の比喩表現をめぐる」『成城文藝』221、2015年6月、pp. 63-77
- (9) Liliane Brion-Guerry (dir.), *L'année 1913: les formes esthétiques de l'œuvre d'art à la veille de la Première Guerre mondiale*, Klincksieck, 1971, 2 vol.
- (10) 小倉孝誠「若い娘たちの表象——魂から身体へ——」『フランス語フランス文学』慶應義塾大学日吉紀要（67）2018, p. 37
- (11) 「フランス両次大戦間の文学に見る〈思春期〉（I-V）」で5回の連載になる予定。

最終回は、「フランス 1920 年代の〈思春期〉文学と現代」

- (12) 「先住民の女」は原文で «Squaw»

### 1 幼年時代と〈思春期〉

- (1) André Gide, *Souvenirs et voyages*, Gallimard, Pléiade, 2011, p. 90 以下、『一粒の麦もし死なずば』からの引用は、本文中に原書ページを p. 90 と示す。訳は既訳を参照しつつ、拙論の筆者の責任において行った。
- (2) プレイヤッド版の編者ビエール・マッソンによれば、この書き方は「外界から押し付けられた時系列の拒否」を意味する。Pléiade, p. xxiii
- (3) ジッドが回想録のために準備した序文草稿の一節 Pléiade, p. 330
- (4) Maurice Blanchot, «Gide et la littérature d'expérience» in *La Part du feu*, Gallimard, 1949, p. 212
- (5) 『地の糧』(1897) 第四の書の一節
- (6) プレイヤッド新版の『日記』には 1887 年以降の記述が収録されている。ジッドの日記については下記を参照した。Eric Marty, *L'écriture du jour Le Journal d'André Gide*, Seuil, 1985

### 2 なぜ〈思春期〉を語るのか

- (1) Philippe Lejeune, *Le pacte autobiographique*, Seuil, 1975, p. 189
- (2) 本文中に年代が明記され叙述も編年体である。「Quand en octobre 93, je m'embarquai pour l'Algérie», Pléiade, p. 270
- (3) この小説ではボリス少年の〈思春期〉の惑いが赤裸々に語られ、女性精神分析医ソフロニスカ女史が彼の治療者として登場する。これはジッドら『新フランス評論』同人が講義を聞いたチェコスロヴァキアの女性医師でフロイトの弟子のソコルニッカがモデルである。
- (4) Pléiade, p. 1097
- (5) *Journal*, t. I, Pléiade, 1996, pp. 948-949
- (6) 父の死は 1880 年 10 月 28 日。発作については、「peu après la mort de mon père» p. 166 とあり、「僕は 11 歳だったはずだ」と書かれている。記憶に頼って書くスタイルが維持されている。
- (7) 「1881 年、12 歳」と明記される。「Cette année 1881, ma douzième, ma mère, qui s'inquiétait un peu du désordre de mes études et de mon désœuvrement à la Roque, fit venir

un précepteur.» p. 145

- (8) 転入早々、級友たちに囲まれた少年は、「お前はカトリックか、プロテスタントのケツ野郎か」（«T'es catholique, toi ? ou protescluc ? » p. 147）と尋ねられた。
- (9) litote（曲言法、緩徐法、節辞法）は文章家ジッドの真骨頂である。
- (10) プレイヤッド版編者マッソンの注解から引用。マッソンはマルタン・デュ・ガールが「言い尽くさない」とジッドを責めたのは、幼年時代の叙述だけでなく、第2部のアルジェリア旅行も含むと考える。Pléiade, pp. 1105-1106
- (11) Pléiade, p. 1097 Madeleine Rondeaux（1867-1938）は、ジッドの母ジュリエットの兄エミールの長女で、作中 Emmanuèle と呼ばれる。
- (12) 第1部第9章も同様。「今日、ふたたび僕の『アンドレ・ワルテルの手記』を開けば、その射袴のような口調に怒りがおさまらない」 p. 243
- (13) «dypitique» とはマッソンの用語。Pléiade, p. 1097 天国と地獄を左右に描き分けた最後の審判図などがある。

### 3 ふたたび悪魔が

- (1) 『一粒の麦もし死なずば』の章立てから、この回想録が、第1部第4章末尾で示された少年を狙う「悪魔」と取りなしを行う「天使」の対立を、第8章の著作によって解消させるドラマには還元できないことが分かる。ブリュージュ版ですでに第1部には第9章、第10章が加わり、続く第2部には2章しかなく、両者は分量的にも、第2部がほぼ青年時代の回想を編年体で語ることから、不釣り合いが大きい。第8章までがジッドの人格構成をさまざまな角度から、時には時系列を乱してまで物語る自伝に類するのに対して、母の家庭教師にして友人アンナ・シャクルトンの死の回想から始まる第8章以降は、ジッドが出会った人々のポートレートを並べた「自画像と肖像」という趣である。とりわけ第2部第2章のオスカー・ワイルドの肖像は、かつてジッド自身が書いた文章を訂正するかのようには語られている。二度のアフリカ旅行の回想も、そこで出会った現地人との交情が、小説『背徳者』の謎解きめいた筆致で語られている。この不整合を踏まえて「悪魔」について考えるなら、第2部の「悪魔」は第1部8章までのそれとは、少なくとも語り手に対する脅威の質を異にしている。
- (2) これは本論第4節で触れる 1883年初頭の出来事（p. 161）。アンドレは母、女中マリー、アンナ・シャクルトンと、南仏で冬を過ごすことになった。
- (3) *Si le grain ne meurt*, Pléiade, pp.165-166, p. 207 この語について論じたロラン・バ

ルトの論文（1942）を解題した堀畑正樹氏は、バルトに導かれてジッドの『日記』1906年4月9日の記述に至った。「バルトの「アンドレ・ジッドとその日記に関する覚書」を読む」『名城論叢』2016年11月、pp. 85-113

- (4) ジャン・ドレ『ジイドの青春1』吉倉範光・尾崎和郎訳、みすず書房、1960年、p. 192
- (5) 回想録第1部第7章は冒頭に1884年と記され、パリに戻った少年がアルザス校への復帰を試みるが「とても耐え難い頭痛」（p. 204）のせいで通学を諦め、リシャール先生（現実にはパウエル Bauer 先生）の寄宿生となった経緯が語られる。また、この年の5月14日に後述する母の家庭教師だったアンナ・シャクルトンが没しているが、それが語られるのは第9章である。
- (6) *Ainsi soit-il ou les jeux sont faits*, Pléiade, pp. 994-995, p. 1008

#### 4 天使的女性像

- (1) 『ユリアンの旅』のエリスを、中村栄子氏はダンテの「ベアトリチェのパロディ」としたうえで、実在するマドレーヌ・ロンドーもジッドにとって「ベアトリチェであった」と推測する。さらに、『アンドレ・ワルテルの手記』のエマニュエル、『パリュード』のアンジェール、『背徳者』のマルスリーヌも、すべて「魂の妹」マドレーヌに通じ、作家の「永遠の女性」だとする。『楽園追求——アンドレ・ジッドの思想と文学——』駿河台出版社、1995、p. 101
- (2) ともに没後刊で、妻の死後に書かれた『我は汝の中にあり (*Et nunc manet in te*)』（1954年）と『かくあれかし、あるいはゲームは終わった』（1950-1951年執筆、1952年刊）が続巻となろうが、生前の出版を希望した『一粒の麦もし死なずば』とは創作的意図が異なっている。
- (3) Jean Delay, *La Jeunesse d'André Gide*, I, Gallimard, 1956, p. 92
- (4) Jacques Lacan, «Jeunesse d'André Gide ou la lettre et le désir», *Critique*, 131, pp. 291-315 引用は p. 301, 302
- (5) Claude Martin, *La Maturité d'André Gide, I, de Paludes à L'Immoraliste (1895-1902)*, Klincksieck, 1977, p. 12 ならば『アンドレ・ワルテルの手記』は21歳のジッドが出版すべきではなく、死後に発見され読者を驚かせる遺稿、それも「全集」に與行きを与える異色作となろう。なお、この書簡草稿に見える妄想的な作家像は、サルトルの自伝『言葉』に見える、芋虫のような肉体が減ぶと言葉が蝶になって宙を舞い、「1955年頃に」書物として国立図書館に収まるという少年の夢想を思

わせる。Jean-Paul Sartre, *Les Mots*, folio, p. 158

- (6) バルトは『彼自身によるロラン・バルト』の中で、ジッド作品をドイツ語で「Ursuppe」（生命の源＝原スープ）と呼び、とりわけジッドのように『日記』そのものが文学でありうるタイプの作家に、愛憎こもごもの感情を抱いている。滝沢明子「『作家』という幻想——ジッドに憧れたロラン・バルト」『仏語仏文学研究』49、2016年10月、pp. 511-521
- (7) Blanchot, *op.cit.*, p. 210 ブランショは作者が自分の生み出した人物たちと格闘し、憑依されると言う。ジッドに即せば、天使的女性を紙の上に生み出したことで、そのような救済の形式に囚われるということだろう。
- (8) マルタンによればマドレーヌがアンドレの求婚を謝絶したのは、『アンドレ・ワルテルの手記』を読んだ直後である。Martin, *op.cit.*, p. 34
- (9) 回想録第1部第9章冒頭で語られるアンナの孤独な死は、「何ヶ月ものあいだ（中略）この神より他のすべてに見捨てられた魂が絶望的に呼びかけ、力を失って倒れるのを、僕は想像し、聞いていた。この呼びかけが、僕の『狭き門』の最後のページに鳴り響いている」（p. 229）と書かれている。このことから、現実には臨終に母も自分も立ち会えなかったのを「悲しんでいる（«je fus extrêmement affecté»）」ものの、アンナは自作の中で不滅となる、とも解せる。だが、そうならジッドの＜思春期＞小説は、女性に対してあまりに酷薄ではないだろうか。